

未来の自分を知りたいか

貴方は、「自分の未来が知りたいか」と問われたら何と答えますか。

私の周りには結構占い好きの人が多いのですが、占いの結果を信じている人は殆どいないと思います。むしろ、当たるも八卦、当たらずも八卦という、いわばゲーム感覚で占いを楽しんでいるという感じでしょうか。

しかし、絶対に当たる確かな占い師がいたとしたらどうでしょうか。

「貴方の将来は明るく輝いていますよ」というような話なら誰でも聞きたいでしょうけれど、現実はその甘くはありませんから、絶対に当たる占いという事になると、ちょっと怖くて軽々しくは聞けない感じがしませんか。

先頃、東京お台場にある日本科学未来館が「世界の終わりものがたり」という企画展を行った際、来場者に対して行ったアンケート調査の結果を公表していますので、以下、このアンケートの結果をもとに、人の「終わり」に関して少し考えてみたいと思います。

貴方の身を脅かす危機予測が出来るとしたら知りたいか、という問いに対して83.3%の人が知りたい、16.1%の人が知りたくないと回答しています。

東日本大震災を経験したにもかかわらず、身に迫る危機を知りたくないという人が16%も存在することに驚きますし、理解に苦しみます。

地震や津波等のように、事前に知っていれば適切に対処できたはずだという事が身の回りにも沢山ありますから、そういうものについては、可能な限り予測して行く事が望ましいと思います。

しかし、事前に知っても、自分の力では如何ともしがたい事もまた沢山あります。その最たるものが、自分の寿命でしょう。

人というものは「死ぬまで生きるものだ」という、理屈にならない思い込みがあるから、一生懸命頑張っている生きてるので、それが「貴方の寿命はあと1年」と宣告されたらどうなるだろうか、自分でも分からないところがあります。

どんな病気になるか予め分かるとしたら知りたいか、という問いに対して、71.2%の人が知りたい、28.3%の人が知りたくないと答えています。

2つの質問に対する回答の違いを見ると、予め地震が来ると分かれば逃げる事も可能ですから、そういう情報は知りたい。けれど、予め防ぐことができない

い情報は知りたくないという、微妙な心の揺れを感じます。

人は皆、いつまでも長生きしたいと願っていますが、残念ながら、全ての人に「終わり」が来ます。それは、生きとし生きるものの宿命です。そうとは分かっているにもかかわらず、終わりを意識せずに生活しているのが私たちの姿です。

細く長く生きたいか、太く短く生きたいか、との問いに対して43.8%の人が細く長く、49.4%の人が太く短くと答えています。太く短くと答えた人も、恐らく「明日、事故にあって死ぬかも知れない」等と考えている人はいないでしょう。それは、自分の「終わり」というものが現実感を伴っていないからだと思います。

危機が迫っているとしたら、残された時間で何をしますか、という問いに対して、危機が30年後なら「農業を始める」「思い出を作る」等と将来を見据え行動したいと考える人が多いようです。

危機が1年後なら「お礼をいいに回る」「やり残した事をやる」等と、残された時間を大切に使おうという気持ちが表れてきます。そして危機が1時間後になると「日記を燃やす」「家族のもとへ行く」等といよいよ事態は切迫し、最後に残された時間が5秒という事になると、逆に「深呼吸」「無心になる」というように、自分の「最後」を受け入れようとするようです。勿論そういう回答ばかりでなく、中には「自ら死ぬ」と回答した人もいたそうですから、人間の気持ちというものは本当に奥深いものです。

自分の寿命というものは、「知るのは怖い、でも知りたい」というのが偽らざる実感です。

「命の蠟燭」という昔話がありますが、目の前に今にも消えそうな蠟燭があって、それが自分の命の灯で、あと僅かで消えてしまうと知らされたら、貴方ならどうするでしょう。他の人の蠟燭を持ってきて継ぎ足したくなるかもしれませんが、でも、結果は、どうあがいても消える時には消えるというのが蠟燭の火ですから、余りじたばたしないようにしようと、心に決めています。もっとも、そのように実行できるかどうかわかりませんが……。

私達は、普段「終わり」を意識して生活することは殆どありませんが、昨年、東日本大震災を目の当たりにしながら、日々の生活の中で、時に「終わり」を意識する事が大事だと感じている人も多いと思います。

「終わり」が何時来るのか、残された時間はどの位あるのか全く分かりませんが、「終わり」があると思えばこそ、今与えられている時間が愛おしく、もっともっと大切にしなければならないと感じる事が出来るのではないのでしょうか。(塾頭 吉田 洋一)